

アニメ映画の巨匠 ノーマン・クラレンス

メイ・エビット・カトラー

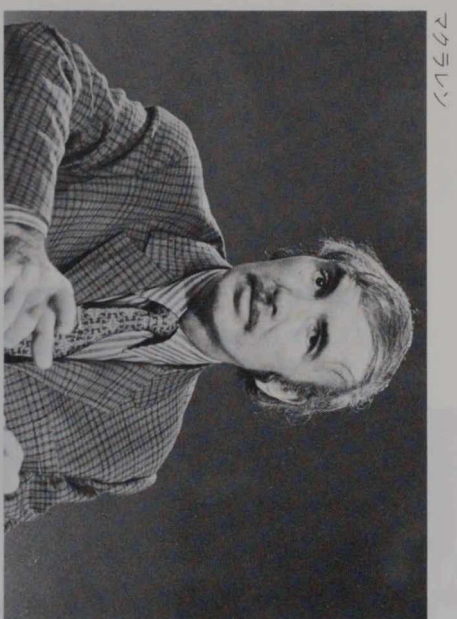
と思っているこの男——について書くとき、「現代アニメ映画に革命をもたらした男」、「抽象映画とアニメーション映画双方の鬼才」、「偉大な先人たちの才能と生命力を再発見した」、「どんな技術上の発見にもあきらまない天才的能力」などという表現が、熱狂的賛辞の中にちりばめられる。

フランス人はペンを借りてクラレンスを絶賛したが、世界の映画界はクラレンスに映画制作者としては最も多くの賞を与えて彼の作品を讀えてきた。一九五二年には「隣人」にハリウッド・アカデミー賞のオスカー賞、一九五五年には「フリンキティ・フランク」に英国アカデミー賞（金賞）が与えられた。そしてベニス映画祭では「過去のつまらぬ気がかり（色彩感覚）」（一九五〇）、「椅子と青年」（一九五七）、「水平線・垂直線」（一九六〇）が一位に入賞し、一昨年は、故オルト・デイズニと共に、国際アニメーション・フィルム協会からアニメー賞を授与されている。

クラレンスの作品は、世界中で上映されており、最も素朴な観衆にも感動を与えているが（彼自身そのことを強く望んでいる）、彼の本領はやはり女人向けのすることである。五〇本ほどの作品の中で上映時間五分をこえるものはあまりないが、その短い時間の間にスクリーンの上には「天啓」の如くひらめきわたり、その「技法」、「創意」、「詩情」、「幽默」、「ヒューマニティ」によって専門家たちを畏敬させ、世界中の何千といふ若い映画制作者たちを鼓舞し、正しい資金や設備にくじけず前進するよう、勇

「私のやっていることが、絵画とアニメーション映画の間のギャップを埋める一歩にでもなれば、と思っている。」——
クラレンス
「もしも純粋映画というものがあるとすれば、クラレンスがその最も偉大な代表者の一人に入ることとは間違いない。」
——ジョン・グリヤソン

フランス人は、芸術としての映画について他のどの国民よりも多くの本を書いている国民だが、そのフランス人がノーマン・クラレンスの天才的才能にはすっかり魅了されている。彼らがこの六十三オの映画制作者——スコットランドで生まれたが、一九四一年以来カナダの国立映画制作所において、自分をカナダ人だ



クラレンス

気づけるのである。乏しい予算は創造性を刺激するという説を固く信じているクラレンスは、「金が少なければ少ないほど、イマジネーションが豊富でなければならぬ」と述べている。一九四〇年の「点と輪」ではこの「節約」を極端にまでおしつめて、芸術家は、サウンズ・トラック付きの小さな傑作をものにするのに、新しいフィルム一本、ペンとインク、はけと絵の具さえあればよいのだ、ということを実証してみせた。

彼の作品はひとつひとつがそれ独特の技法を使って作られているが、クラレンスの名前と一番よく結びつけて語られるのは、彼が完成させた次の五つの技法である。すなわち（一）カメラを使わずに、手描き手塗りで作ったフィルム。（二）静止した絵を撮影して作った「パステル画、フィルム。（三）俳優を使った「ピクチャー（いたずら）技法——カメラと演技の速度が、演技者に動画的動きを感じさせる

ように、調節されている。四）直接サウンズ・トラックにかきこむか、あるいは六オクタニアのマイク・カードを写真にとることににより創り出す「アニメーション・サウンズ」技法。（五）二次元の平面材料に三次元の立体効果を与えるステレオ・グラフィック・アニメーション（これまでにこの技法を使った作品は、クラレンスの「Now is the Time」と「Round Is the Now」の二作品だけである）。

芸術的には、クラレンスの作品範囲は、われわれの時代がもつさまざまな傾向全てに及んでいる。ロベール・ベナエーシスは、「ウォルト・ディズニ後のアニメーション」の中で、次のように指摘している——クラレンスの作品をざっと調べるだけでも、現代芸術をその全体にわたった絵を撮影して作った「パステル画、フィルム。（三）俳優を使った「ピクチャー（いたずら）技法——カメラと演技の速度が、演技者に動画的動きを感じさせる。彼は、われわれにオートマティスムのつすばらしさをみせてくれる唯一の映画作家である。」

「一定の定型的な芸術が私の作品に影響を与えたことはない」と自ら言うように、彼はいかなる芸術運動にも属さない。そういう自分のやり方を、ちよと意識下の精神の形と内容を解放するのに手近かの材料を使って実験してみる農民芸術家のように、「職人芸」的だと述べている。これでは彼をあまりに単純化した言

い方になろう。

彼の才能は、実際には、芸術家と科学者と批評家の三つの才能が合わさったものである。もちろん彼の作品では芸術性が圧倒的に大きく、他の二つの側面もそ